

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 8 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2014

課題番号：25870415

研究課題名(和文) 日本美術館建築の内部空間におけるデザインと思想の形成過程

研究課題名(英文) Design and aesthetic for interior space of museum in Japan

研究代表者

櫻間 裕子 (SAKURAMA, YUKO)

大阪大学・文学研究科・研究員

研究者番号：30649603

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はまず、前川國男や磯崎新らの美術館建築についての資料収集および情報整理を中心に着手し、とりわけ谷口吉郎の美術館建築論の特性を明らかにした。谷口の美術館建築では、「日本の美術」や「日本の近代美術」の概念形成に積極的に関わり、能の理論を援用しながら展示空間を設計させ、日本独自の展開を見せていた。これは、日本の美術史学と美術館学や展示学の形態論的交差の重要な事例であり、現代の美術館建築を分析する重要な視座を提出するものである。

研究成果の概要(英文)：This study started, at first the searching of documents and the categorizing of museums for architecture of Maekawa Kunio, Isozaki Arata etc., and then especially proved the characteristic of the design of museums by Taniguchi Yoshiro. His architecture of museums approached actively the formation of concept "the art of Japan" and "the modern art of Japan", designing the exhibition space with using the theory of Noh. Its development was very unique for the field of Japanese modern architecture. This work is important case that is standing the point between the study of Japanese art history and the museology of Japan. It will be shown the necessary point of view for analyses of contemporary architecture of museums.

研究分野：美学・芸術学

キーワード：美術館建築 芸術学 展示デザイン 美術館学

1. 研究開始当初の背景

(1) これまでの日本における美術館研究は、西欧から輸入した美術館を、ひとつの美術「制度」として考察し、美術館の建物としての有り様を検討した美術館建築の発展史に関して焦点があてられることは極めて少なかった。

(2) 本研究開始当初は、「美術館」を視覚芸術鑑賞の人間と作品を結び付ける場として捉え、「内部空間」の設計論に焦点をあてた造形的分析を試みるため、主にフランスやイタリア、アメリカを中心とした近代美術館建築の変遷史をたどっていた。

とりわけパリ国立近代美術館(1985)やオルセー美術館(1986)の内部空間を設計したイタリアの建築家ガエ・アウレンティ(1927-2012)の美術館設計論を研究し、既に近代美術館として先駆的な存在であったニューヨーク近代美術館の内部空間の問題の比較を重ね、いわゆるホワイトキューブ論の限界と応用可能性について研究を行っていた。

(3) 西欧近代美術館建築では特に、60年代のミニマル・アートの興隆により「インスタレーション・アート」と展示空間の問題を契機として、建築家による展示空間設計の意義そのものが危ぶまれる事態が起こった。日本の美術館建築の状況もまた、ホワイトキューブ論を含めた西欧近代美術館建築の状況と同じ芸術学的問題系を抱えるものとして比較考察を進めることが重要であると考えられた。

2. 研究の目的

(1) 例えば20世紀初頭にモダニズム建築をコルビュジェらのもとで学んだ前川國男(1905-1986)は、60年代以降、機能的な平面計画の展開を模索することで内部空間への問題意識を深めることとなった。

本研究は、世界的に拡散していたモダニズム建築からの逸脱、更新を求める建築論と並走

する日本の美術館建築論を、芸術領域との関係において網羅的に分析、考察することによって新たな建築論を補完することを本研究の目的とした。

(2) また、西洋との比較において独自かつ急速に展開してみせる日本の戦後建築史の中の美術館建築の発展過程をたどることにより、建築学と芸術領域との最も近接した先駆的設計を行ったと考えられる谷口吉郎(1904-1979)や磯崎新(1931-)の美術館建築論および設計案等の資料を詳細に検討し、ポストモダニズム建築の潮流のその他の建築家らとの比較考察を行うことも本研究の目的とした。

3. 研究の方法

(1) 近代美術館建築の設立を20世紀前半と後半に大別しながら、主要建築の資料整理及び美術館論精読する。20世紀前半に設立された大原美術館(1930)、京都市美術館(1933)、大阪市立美術館(1936)などにおける展示空間設計論及び当時の受容史を確認し、また同様に、戦後まもなく建てられた日本で最初の近代美術館のためのモダニズム建築、鎌倉近代美術館(1951)や東京国立近代美術館(1952)、大阪万博美術館(1969)(後の国立国際美術館)、東京都美術館(開館1926、改築1975)など日本の美術館建築史に欠かすことのできない設計案を導き出した坂倉準三、谷口吉郎、川崎清らの美術館建築論を分析、整理する。

(2) 美術館論分析後、日本における美術館論の独自性の分岐点として谷口吉郎の東京国立近代美術館を見出し、研究の中心課題とした。特に日本における「近代美術」概念形成期であった1940年代後半から50年代における谷口の思考をよく示すものとして「旗の意匠-姉妹藝術」『清らかな意匠』(1948)などを中心に考察対象とした。

4. 研究成果

(1) 谷口吉郎の美術館設計論の特性を以下の3点において明らかにした。

ドイツ新古典主義への傾倒から日本の伝統芸能に依拠した劇的美術館論へ

谷口は、1930年代にベルリンの日本大使館設計に携わったことから、新古典主義建築やバウハウスなどのモダニズム建築に影響を受け、それが建築のみならず文筆においてもよく表されていた。(『ギリシャの文化』(1942)、『雪あかり日記』(1947))

谷口建築がその後、独自の和風建築路線へ転向したと見るのは建築史において通説となっている。本研究では、その転向が美術館内部空間設計を検討する中で意識化されていき、その変遷がまずは『清らかな意匠』所収「旗の意匠-姉妹藝術」の文筆にて確認され、東京国立近代美術館の開館時(1952)から竹橋の新館設計(1969)において実践されていることを明らかにした。

これらの流れに通底していることは、「旗の意匠」で述べられる能という日本の伝統芸能に依拠したいわば精神的な伝統主義であった。

谷口は、絵画や彫刻の関係を姉妹藝術と呼び、それらが展示作品となる時は、能における「シテ」役とみなし、その展示空間たる建築は「ワキ」役に徹することが肝要だと考えていた。それは旗のデザインでいえば、棒と布と紋章という旗の三要素のように、不可分な構成物(=「建築的意匠の美」)であるべきだ、と谷口は考えた。以上のことから、谷口のアート館論の骨子は、美術館の展示空間を能の劇空間のように一種の空間芸術とみなし、建築的意匠の美を達成しようとしていた、ということが明らかとなった。これは、同時代の他の建築家の美術館論には明確にされていない点であり、なおかつ日本で最初の国立近代美術館にて実践された、重要な考察点の提示であった。

美術概念との交差

谷口の東京国立近代美術館との関わりは開館当初からのシリーズ展「現代の眼」展の展示空間設計を依頼されたことから始まった。

(第一回「現代の眼-日本の美術史から-」(1954)、第二回「現代の眼-アジアの美術史から-」(1955)、第四回「現代の眼-暮らしの中の日本の美-」(1963)、第五回「現代の眼-東洋の幻想-」(1966))

とりわけ第一回「現代の眼」展は、美術館の学芸員側もまた日本の「美術」ないし「近代美術」の概念規定が緩やかであったという認識から、谷口との展示空間作りを進める中で公に明らかにしようという意図があった。

本研究では、美術館側の「近代美術」を可視化するために、開館当初から谷口の劇的空間論が採用され、谷口の空間芸術への意図が実現されたことを結論づけた。

美術作品との交差

谷口は、東京国立近代美術館新館(1969)設計においてもまた、建築家側からの「近代美術」への接近を試み、ある種の空間芸術を実現させようとしていた。

谷口は1949年からすでに、丹下健三、前川國男とともに新制作協会(猪熊弦一郎ら1936年創設)に参加し、建築部(現スペース・デザイン部)を設け、建築家と画家との共同活動を積極的に行っていた。(例『建築+美術作品写真展』(1968))

このような流れも関係して、東京国立近代美術館設計案では、二階まで吹き抜けになっている空間に展示される大型の壁画作品やオブジェ作品と対置するように、一階と二階を繋ぐ階段を装飾的なオブジェとして設計し、配置した。本研究では、この試みを、谷口の劇的空間をさらに造形的に特徴付けるものとして位置づけた。また谷口のこの設計は、日本の美術館設計の変遷が、一見すると簡潔で平明なモダニズム建築へと傾倒する流れと逆行する。しかしこのことこそが日本の伝

統回帰を付随させ、建築と美術のジャンル横断的試みを可能にし、日本独自の美術展示空間の変遷をたどる重要な一特性として位置づけることができる。

(2) 日本の美術館建築設計におけるホワイトキューブ論の重要性とその後の展開を、前川國男や磯崎新らを中心に考察し、「ホワイトキューブの応用」の可能性を提示した。

「ミュージアムはモダニズムの産物」と言われるように、近代の歴史認識や美術史と並走しながら成立し、特に展示空間は、近代美術史によって変遷し、またその逆もあるという影響関係にある。本研究では、ニューヨーク近代美術館 (MoMA、1929 開館) のような欧米の近/現代美術の理論的構築を行い、それを視覚化したような展示空間を作り上げた事例を踏まえながら、日本との状況を比較検討おこなってきた。

とりわけ 1939 年にインターナショナルスタイルを採用し改築した MoMA のホワイトキューブは、抽象表現主義運動の芸術を展示する為に洗練されて行った展示空間であり、それがやがて芸術ジャンルの再構成につながった。この展示空間の設計は、全ての部屋を白い壁の四方で囲み、展示作品をひとつひとつ自律させて鑑賞することを可能にしてくれた。ホワイトキューブは展示空間設計に最適な手法とされ、常に変わらない白の内部空間を提供している。

本研究では、日本がホワイトキューブを直接的に採用せず別のアプローチを検討している事例を見出すことにつとめた。その一つとして、前川國男の東京都美術館 (1975) 設計案は、坂倉準三の鎌倉美術館やコルビュジェの建築の影響を受けつつも、新しい日本の美術館建築像を模索した事例であると結論づけた。そこでは、60-70 年代に多様な変化を見せる当時の新しい芸術の状況を写し出すかのように、ホワイトキューブの組み合わせ方に新しい糸口を見出し、い

わゆる雁行型の平面プランを作り出し、その後の美術館に一つの原型をもたらした。今後の展望としては、磯崎新のロサンゼルス現代美術館 (1986) やブルックリン・ミュージアム (1986、拡張) の実地調査を終え、資料整理の段階となっている。磯崎は、これまでの議論からすれば、極端にホワイトキューブを退けたり、意図的に採用したりするなど、ポストモダンの手法とともにホワイトキューブの自由な応用を試みている。また、ブルックリン・ミュージアムはアメリカの「近代美術史」を含む近代史や文化史を取り扱う。本研究は継続してこれら展示品の史実と空間をどのように視覚化させているかの考察し、美術館建築論の体系化を目指す。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

櫻間 裕子、日本の美術館建築における劇的空間是非論 -谷口吉郎の東京国立近代美術館設計を中心に-、フィロカリア、査読有、31号、2014、1-16

[学会発表](計0件)

[図書](計0件)

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

櫻間 裕子 (SAKURAMA, Yuko)

大阪大学・文学研究科・招聘研究員

研究者番号：30649603